

ILO広報誌

ワールド・オブ・

ワーク

2007

第1号
(通巻7号)

J.Mallard/ILO

共に働き
貧困から
抜けだそう



ILO駐日事務所

本号の他の記事

働く上での平等:ILOグローバル・レポート
小規模保険:貧しい人々の保護

フィリピンの家事労働者

75年前のアルベール・トーマを偲ぶ

(World of Work 2007年4月発行第59号より)



©ILO

1932年5月8日の午前3時30分、私は鳴り続ける電話の音で目覚めた。「邪魔して悪いんだが...」と友人の声。「悪いニュースだ。アルベール・トーマが死んだ。昨夜、パリで突然亡くなったんだ。」

ILOの初代事務局長(1919~32年)アルベール・トーマは、「まさに、ILO事務局を体現していました。ILOが達成すべき目的である社会正義は、彼の人生を支配した情熱そのものでした。」1920年以降、アルベール・トーマの側近として働き、後にILO事務局長となったエドワード・フィーランは、このように書いている。

アルベール・トーマの輝かしいキャリア、すなわち、フランスのジャーナリスト、政治家、閣僚、大使としての経歴は良く知られているが、1919年にILOの事務局長に選ばれたことは、驚きであった。「その時から、彼は新しい仕事に全身全霊を傾けました。そして、1920年にはロンドンの民家を拠点とする職員数人の小集団だったものを、数年のうちに、世界中に影響を与える機関に育て上げたのです。」彼のリーダーシップのもと、ILO総会は、労働時間、就業最低年齢、健康保険、母性保護、失業、結社の自由、労働災害に対する保護、最低賃金、強制労働などの重要問題に関する33の国際条約を採択した。

トーマをよく知る人々の話から、ILOの

創設後最初の10年間の業績には、彼の人が大いに寄与したことは明らかである。ILO理事会の議長であったアチュル・チャテルジー卿は次のように述べている。「彼は、当時の世界で最も偉大な政治家の一人でした。彼のビジョンと熱意は、社会正義の理想に留まらず、国家間の相互理解と善意という遠大な大義を擁していました。彼は普通の人々の数人分の仕事をしました。彼の関心は無限に広がっていました。彼は、説得力のある偉大な雄弁家でした。頭の回転が速く、洞察力があり、記憶力も抜群でした。彼は卓越したオルガナイザーであり、そのイニシアチブとリーダーシップには目を見張るものがありました。攻撃的とも言える性格の素質をすべてもちながら、彼は、全身全霊を和解と調停に捧げました。彼の性格の強さは、優しさと善意に裏打ちされていたのです。」

トーマを引き継いだハロルド・バトラーは、彼の「信念、エネルギー、勇気、犠牲的精神」に言及し、1933年のILO総会で次のように語った。「社会条件の改善、個人の人権の保護、社会正義の推進は、彼が伝統として築き上げることに成功し、私たちが受け継いだ礎である。彼の仕事の記念碑として最もふさわしいのは、この伝統を守り、さらに強化することである。」



『ワールド・オブ・ワーク(仕事の世界)』誌は、ジュネーブのILO本部コミュニケーション・広報局より年3回発行されている広報誌。英語版のほかに、アラビア語、中国語、チェコ語、デンマーク語、フィンランド語、フランス語、ヒンディー語、ノルウェー語、スペイン語、スウェーデン語の各国語版がある。英語版の記事の一部を和訳収録した日本語版は、ILO駐日事務所より年2回発行されている。

本号は、『ワールド・オブ・ワーク』誌英語版の第58号(2006年12月発行)および第59号(2007年4月発行)掲載記事の一部を和訳収録したものに、日本関係情報を盛り込んだものである。

本誌は国際労働機関(ILO)の公式文書ではなく、表明された意見は必ずしもILOの見解を反映するものではない。本書中に用いられる呼称は、いかなる国、地域、領域、その当局者の法的状態、またはその境界の決定に関するILO側のいかなる見解をも示すものではない。

企業名、商品名および製造過程への言及はILOの支持を意味するものではなく、また、特定の企業、商品または製造過程への言及がなされないことはILOの不支持を表すものではない。

本文および写真(フォト・エージェンシーのものを除く)は、出典明記のうえ、自由に転載できます(掲載誌を下記宛お送りください)。

発行：ILO駐日事務所
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-70
UNハウス(国連大学本部ビル)8階
TEL: 03-5467-2701
FAX: 03-5467-2700
http://www.ilo.org
印刷：(株)タイヨーグラフィック

共に働いて貧困から脱却する

(World of Work 2006年12月発行第58号より)

アフリカからアジア、北から南にわたり、今日、貧困は世界中で大きな懸念事項であり続けている。世界全体で28億人となる労働者の半数近くが、自分自身と自分の家族を、1日1人当たり2ドルの貧困線から上回らせるだけの稼ぎを得ることができていない。それよりも低いレベルで生きている人さえいる。この問題について何ができるだろう。ファン・ソマビアILO事務局長が指摘するように、人々が欲しているのは奇跡などではなく、人間らしく働ける「ディーセント・ワーク」を見つける方法なのである。本号では、正にILOの支援する戦略を用いて、これに取り組んでいる姿を世界各地から示す。

4ページ

働く上での平等

(World of Work 2007年4月発行第59号より)

労働の世界は差別に取り組む上での独特の参入点となる。大きな進展が見られるものの、不平等は依然として強く残り、世界全体の数百万人に影響を与え、社会がその十分な潜在力を発揮するのを妨げている。本号のもう一つの特集では、ILOの新しいグローバル・レポート『働く上での平等に係わる課題への取り組み』を取り上げる。

8ページ



©M. Crozet / ILO

特集報告

共に働いて貧困から脱却する：奇跡はいらない、欲しいのはディーセント・ワークのみ	4
ILOグローバル・レポート	8
深く潜み、不安をもたらす：働く世界における新しい形態の差別と不平等	

一般記事

エンパワーメントの火をともし：「私たちは重要な存在」と主張するフィリピンの家事労働者	12
--	----

書籍特集

『貧しい人々の保護：小規模保険概論』	16
小規模保険：社会財政と社会的保護の結びつき	

最近の動き

失業・不完全就業が増大し、働いても貧困で若者が痛い目に：ILO新刊	20
児童労働の隠れた恥部：仕事上の児童に暴力	21
国際運転手：遅延から病気まで、引きずる重荷	22
新しい技術、古い問題：小売部門における生産性向上と雇用の両立	23
世界各地で働くILO：ILOとUNDP - ディーセントな仕事の促進に向けて手を結ぶ ほか	24
2007年労働安全衛生世界デー・フォーラム	27
労働・人権分野におけるCSRシンポジウム	28
ILO駐日事務所：活動ハイライト	29
書籍紹介	30

国際労働機関（ILO）：創立1919年。加盟国（現在181カ国）の政府、使用者、労働者の共同行動を通じて、世界中の社会的保護、生活・労働条件の向上を図っている。ジュネーブにある国際労働事務局はILOの常設事務局。駐日事務所を含み、40以上の現地事務所がある。